

MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース



新着収蔵資料紹介

■高田箕水篆刻関係資料一式

高田箕水(1907-1990)は、秋田市で印房を営み、書家・篆刻家として知られた人物です。箕水が没した後、高田印房は廃業しました。残された印刻に関わる制作用具一式は平成20年に、また高田印房に関する資料は平成26年に当館に寄贈されています。写真は、今年度寄贈を受けた篆刻作品、印譜の一部です。印譜には大正から昭和初期にかけて制作されたと記録があります。

CONTENTS

- 01 表紙・目次
- 02 展示報告 佐竹氏遺宝展一守り継がれた大名家資料一
- 04 展示紹介 外来生物一運ばれる生き物たち一
- 05 展示報告 近江谷栄次と小牧近江 父子の軌跡
- 06 資料紹介 (歴史部門)
学芸ノート (出前授業)
- 07 学芸ノート (民俗部門)
- 08 令和4年度展示スケジュール

NO. 174



展示報告

令和3年9月18日(土)～11月14日(日)

大名家資料は、華やかな大名の暮らしぶりを物語るとともに、その時代の工芸技術や歴史を証する貴重な文化財です。本展では秋田藩佐竹氏の歴代の肖像画、藩主みづからが筆をとった書画、所用の甲冑、奥方の調度品など102点を展示しました。明治4年(1871)の廃藩置県から150年を経過し、その間に大名家資料の多くが失われてきました。そうしたなかで佐竹氏の旧蔵品がさまざまな人の手を経て継承されてきたことは、幸いと言うべきでしょう。

展覧会では、秋田の歴史に関心の高い方々が多かったとみえ、郷土史等の学習団体の利用も目立ちました。「素晴らしい物が沢山あった」、「肖像画、書状、甲冑、水墨画が特に魅力的だった」、「近世初期の古文書は圧巻だった」などの声が寄せられました。新型コロナウイルスの流行が終わらぬなか、検温などで来館者にご不便をおかけしながらの開催でしたが、6300人余りの来場がありました。佐竹氏資料の展示会としては、当館では昭和54年(1979)の「佐竹家260年展」以来40年ぶりの開催となりましたが、改めて郷土の大名への関心の高さが浮き彫りとなりました。

(歴史部門：新堀 道生)

主催 遺宝展実行委員会 (構成団体：秋田県立博物館、秋田魁新報社)

協力 東京大学史料編纂所



秋田県誕生150年記念

特別展

佐竹氏遺宝展

— 守り継がれた大名家資料 —



キミたち、
どうして日本へ!?

外来生物

企画展

運ばれる生き物たち

2021 12.4 sat > 2022 4.3 sun



台湾ザルやアライグマ



ミシシippアカミミガメとホクベイカミツキガメ



アメリカザリガニとウシガエル



外来植物のコーナー

外来生物とは何か?をテーマに企画展を開催しました。「1章 島国日本と外来生物」では、史前帰化種や国内外来種など外来生物のさまざまな姿やその考え方を紹介しました。

「2章 障壁を越える」では、国外外来種が日本へ導入された経緯を、「3章 秋田の外来生物」では、これまで県内で確認された外来生物と現状を紹介しました。

冬休みの自由課題のテーマにと来館してくれた小学生、ヒアリが予想以上に小さかったと残念がる園児、秋田市草生津川で捕獲されたホクベイカミツキガメの剥製と写真を撮るご家族、管理地に侵入する外来植物のご苦労について詳しく教えてくださった年配のご夫婦等々、さまざまな年代のお客様にお越しいただきました。本展示が外来生物問題を私たちの身近な問題として考えるきっかけとなれば幸いです。

開催にあたり、県内外の多くの方々からご協力いただきました。資料の借用、情報のご提供、調査にご協力いただきましたすべての皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

展示構成

- 1章 島国日本と外来生物
- 2章 障壁を越える
- 3章 秋田の外来生物
- 4章 生物多様性を守る

(生物部門：藤中 由美)

令和3年9月25日(土)～11月28日(日)



近江谷栄次(1874～1942)

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

近江谷栄次 と 小牧近江 父子の軌跡

〈展示構成〉

父－近江谷栄次

1. 生い立ち
2. 近江谷栄次の事績
3. 栄次と井堂

子－小牧近江

1. 生い立ち
2. パリ留学
3. 『種蒔く人』
4. 文学と外交と
5. 戦後の小牧近江



小牧近江(1894～1978)

今年度の秋田の先覚記念室・企画コーナー展では、土崎港町（現在の秋田市土崎）を中心に活躍した事業家・近江谷栄次と、その息子の文学者・小牧近江の父子二代についての展示を開催しました。

近江谷栄次は、若くして土崎の豪商の後継者となって以来、商取引所の開設、銀行や信用組合などの金融機関の創設、発電事業、土崎港築港運動など、様々な事業活動を展開し、現在に至る町の基盤を築きました。

その息子の小牧近江（本名：近江谷駒）は、留学したパリの地で第一次世界大戦を経験し、またヨーロッパで隆盛した平和運動や平等主義の思想をわが国にもたらしました。土崎小学校の学友である金子洋文、今野賢三と創刊した雑誌『種蒔く人』は、プロレタリア文芸運動の先駆けとして文学史に名を刻んでいます。2021年は、雑誌『種蒔く人』が創刊されてからちょうど100年となります。

本展では、父子それぞれの生い立ちから、異なる分野に刻まれた業績を、資料展示と解説パネルでご紹介しました。展示資料は、栄次の事業に関わる事務文書や広告、『種蒔く人』創刊者3人の名が並んだ小学校の名簿、栄次の胸像など多岐に渡りますが、中でも栄次や小牧が、外国から郷里の家族へ宛てた書簡には、家族の絆の深さが感じられました。

また、展示に関連した付帯事業として、秋田の文学研究の第一人者であり、小牧近江の評伝を新聞に連載中の文学博士・北条常久先生をお招きし、「父・近江谷栄次 子・小牧近江」と題してご講演いただきました。約50名の参加者がみえられ、秋田の風土が生んだ、先見性と広い視野を持つ父子二人のエピソードに興味深く耳を傾けられました。

（秋田の先覚記念室：三浦 たみ子）

展示の様子



講演会の様子



小牧近江パリ留学時の書簡など
（あきた文学資料館ほか蔵）

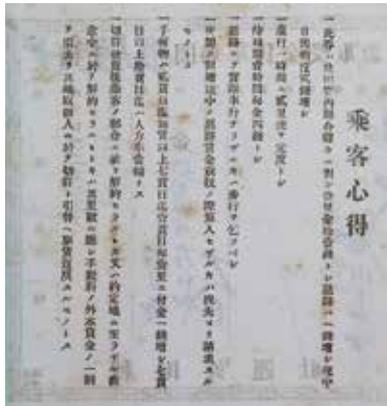
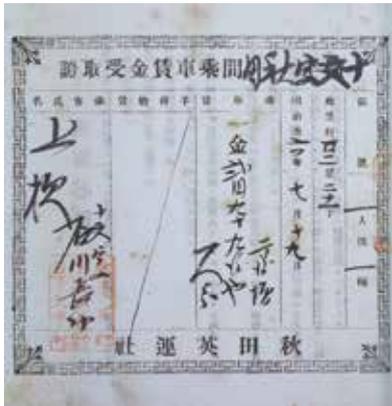


渡欧前の
近江谷栄次と小牧近江

明治時代の「人力車乗車券」—十文字発・秋田行—

下の写真は、明治36年（1903）に県内で発行された人力車の乗車賃金受取証（乗車券）です。走行区間は十文字・秋田間であり、乗車賃の欄には「一人分」と書かれています。また「此里程廿二里二十一丁」とあることから、走行距離は22里21町（1里=36町）、メートル法で換算すると約88.7kmになります。なお裏面には「乗客心得」が印刷されており、1里ごとに11銭徴収するが、悪路や夜間の走行となる場合には追加料金が発生するなど、細かな規定が記されています。そこで表面に記されている乗車賃を確認すると「貳円九十九銭」とありますが、その脇には二割増しとなったことが記されています。1里あたり11銭として乗車賃を計算するとおおよそ2円49銭、これが二割増しになると2円99銭程度となります。割増しとなった理由は明記されていませんが、上記の悪路や夜間走行等の条件が加味されたのかもしれませんが。

ちなみに、これから2年後の明治38年（1905）には奥羽線の全通が実現します。この人力車乗車券は、鉄道開通以前の秋田の交通史を物語る貴重な資料であるといえます。（歴史部門：黒川 陽介）



「十文字秋田間乗車賃金受取証」
 【左の写真】表面
 【右の写真】裏面の「乗客心得」

出前授業

昨年度小学校6年の理科を受け持っている三種町の教頭先生から「大地のつくりと変化」という単元の授業で、化石の標本を借りられないかとの問い合わせがありました。貸し出しに合わせて出前授業を提案したところ快諾いただくとともに隣の学校にも声をかけてもらい、同日に授業を設定しました。また、県教委が配布した社会教育施設の出前授業のPRを目にした同町の複数の小学校から申込があり、合わせて5つの学校にお邪魔しました。今年度はコロナ禍で依頼を受けられなかったり、広報ができなかったりといった状況でしたが、状況が落ち着いた10月以降に依頼のあった小学校と連絡を取り、同町の4つの小学校で行いました（昨年度お邪魔した2つの学校は実際の地層を見学しに行きました）。

出前授業の内容は右指導案をご参照ください。授業終了後の休み時間にもたくさんの児童が質問したり、化石の観察をしたりしていました。

（地質部門：大森 浩）

「安田海岸の地層」			
・対象学年【小学校6年生～中学校1年生】 ・教科等との関係（教科名・単元名）【理科 大地の成り立ちと変化】 ・活動を通して身に付ける力（ねらい） 剥ぎ取り標本などの観察を通して大地の成り立ちと変化について理解を深める。 ・実施時期【10月～3月】			
段階	学習活動	指導上の留意点	資料・材料など
導入 (5)	1 本時の課題を確認する。	・これまでの地層の学習について簡単に振り返り、本時の課題を確認させる。 「地層を調べることで何がわかるのか」	
展開 (30)	2 安田海岸の地層について確認する。	・PCの画像を見ながら地層の大きさや現在の状態を確認させる。 ・地層の傾きと地層累重の法則から右側に移動するほど古い時代の地層が見えることを説明する。	①PC、プロジェクター
	3 露頭を詳しく観察する。(5)	・画面を実際に歩く速度で動かし、現地にいるような感覚で観察できるようにする。	
中 (35)	4 地層中の化石を観察する。(小10 中13)	・剥ぎ取り標本と安田海岸で採取された化石を観察し、当時の環境について確認させる。 ・密にならないようにローテーションで資料の観察をさせる。 ・中学生には示準化石・示相化石についても触れる。	●貝化石を含む剥ぎ取り標本、化石標本
	5 地層中の火山灰を観察する。(小5 中7)	・火山までの距離により火山灰に違いがあること、広域火山灰は噴火の年代が知られていることを伝える。 ・中学生には縫層にも触れる。	●火山灰を含む剥ぎ取り標本、火山灰標本
まとめ (10)	6 垂灰を観察する。(5)	・垂灰について説明し、剥ぎ取り標本を観察させる。	●垂灰層を含む剥ぎ取り標本
	7 学習内容についてまとめる。	・本時の学習内容についてまとめる。 「大昔のこの地が、どんな環境・気候だったのかを知ることができる。」 ・中学生には秋田の大地の特徴についても触れる。	

県内の学校に配布された指導案

中山人形の犬3種

中山人形は横手市で制作されている土人形です。明治のはじめ頃、旧平鹿町の中山地区で誕生したことから中山人形と呼ばれました。古くは歌舞伎や活動写真を題材とした人形を作っていましたが、昭和のはじめ頃、3代目の樋渡義一が、秋田の風俗や行事などを表現した新しい中山人形を生み出しました。

今回は、義一の作った新作人形のうち、3つの秋田犬の人形を紹介します。

忠犬ハチ公と秋田犬

樋渡義一は人形を制作する際、さまざまな人から助言を得ています。この2つの犬の人形は昭和10年頃に作られたものですが、制作にあたり、義一は秋田犬の保存に尽力した、大館中学校教諭の小野進と何度か書面のやりとりをして、人形の添削を受けていました。写真1のレリーフは、立耳、巻尾の典型的な秋田犬の姿をしています。

写真2は忠犬ハチ公です。後年左耳が垂れてしまった後年の姿が表現されています。毛の色は、白と黄色の混ざり合った複雑な色で、実際にハチを見た人の助言がなければなかなか出せない色合いで彩色されています。



【写真1】秋田犬レリーフ



【写真2】忠犬ハチ公

尾振り秋田犬の誕生

義一は中山人形を、単なる郷土の土人形ではなく、秋田の風俗を伝えるための教材にしたいという思いを持って制作していました。

上記の犬から約20年後の昭和30年代前半、義一は新たな秋田犬の人形を作ります。「尾振り秋田犬」と名付けられたこの人形は、尾にバネがつけられ、尻尾が揺れるように作られています。立耳、巻尾の特徴はありますが、全体に丸みを帯び、形もシンプルです。

この人形は、秋田県工業試験場の野口正治技師と共同で制作されました。野口技師は、秋田県の要請で昭和31年から工業試験場に勤務し、天然ガスを使った「ガス窯」の開発や、新たな陶器用の土の研究を行った人物です。新しい県産品の開発に尽力し、楯岡焼の復興も行っています。

「尾振り秋田犬」は、昭和36年に開催された秋田国体で、参加者達の土産物として好評を得ました。また、昭和39年の東京オリンピックでは、全日本推奨みやげ品審査会から「外人向け認定マーク」を受けています。この人形は高さが8cm程度と小ぶりで、雄々しさよりも、可愛らしさを強調した秋田犬の姿になっています。国内外へ流通する土産物としては、実物に忠実であるより、こうした形が求められたのでしょう。

義一は、生涯を通して、その時代に即した中山人形を生み出しました。「尾振り秋田犬」が出た頃から、中山人形の代表ともいえる十二支土鈴が毎年作られるようになります。

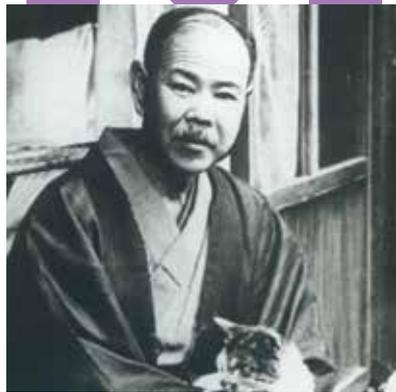
中山人形は現在も樋渡家に継承されており、令和2年度には、秋田県伝統的工芸品に指定されました。従来の型の人形制作を行いつつ、時代のニーズに合わせた人形を柔軟に生み出し続けたことが、中山人形の継承と発展に関わっていると思われます。
(民俗部門：丸谷 仁美)



【写真3】尾振り秋田犬

秋田県立博物館 令和4年度展示スケジュール

企画展・特別展



企画展

深澤多市

—郷土研究と真澄研究の偉業—

4月29日(金・祝)～7月3日(日)

深澤多市は私財をなげうって秋田叢書を世に送り出しました。多市の学問の礎となった漢詩文の学びや官吏生活での交流をまじえながら、叢書刊行の礎となった郷土研究と真澄研究の足跡を資料や刊行物などから紹介します。

特別展

『大恐竜展』 秋田

—生命の鼓動を感じて—

7月23日(土)～8月28日(日)

恐竜の骨格標本、恐竜模型、クラフト恐竜、恐竜の化石などの展示やアトラクションを通して、生命の神秘、地球の歴史などを学び体験することができる展覧会です。

企画展

秋田の縄文遺産

9月24日(土)～11月6日(日)

「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されたことを記念して、国・県指定の縄文時代考古資料が一堂に会します。秋田に遺された縄文の優品を通して、世界に認められた“JOMON”の価値や魅力を探ります。

企画展

新着・収蔵資料展

11月26日(土)～令和5年4月2日(日)

秋田県立博物館は開館以来、秋田県の知の拠点として、情報・資料の収集を続けてきました。その貴重な資料の中から、これまで未公開だった資料を中心に紹介します。

コーナー展



ふるさとまつり広場 (2F)

①子どもの成長を願う

～鹿島船～

4月21日(木)～6月21日(火)

②夏のまつり

～七夕絵どうろう～

7月7日(木)～8月31日(水)

③巧みな手仕事

～刺し子～

9月29日(木)～11月15日(火)

④昔の遊び

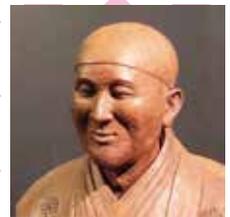
～秋田の風～

12月1日(木)～令和5年2月7日(火)

⑤春の訪れ

～ひな人形・押し絵～

令和5年2月22日(水)～4月4日(火)



菅江真澄資料センター (1F)

vol.88 地誌『雪の出羽路平鹿郡』
を読む

—第1期—

7月16日(土)～9月4日(日)

—第2期—

10月22日(土)～12月11日(日)

vol.89 真澄、はじめての秋田

令和5年3月25日(土)～5月14日(日)



秋田の先覚記念室 (2F)

武藤鉄城

—秋田の考古と民俗—

9月24日(土)～11月27日(日)

惜別

2021.3



JR貨物グループ
秋田臨海鉄道(株)
鉄道友の会
秋田支部

秋田県立博物館ニュース No.174
2022.3.16発行 ●編集・発行 秋田県立博物館

秋田県立博物館

〒010-0124 秋田県秋田市金足嶋崎字後山 52 TEL:018-873-4121 FAX:018-873-4123
E-mail:info@akihaku.jp URL:https://www.akihaku.jp/